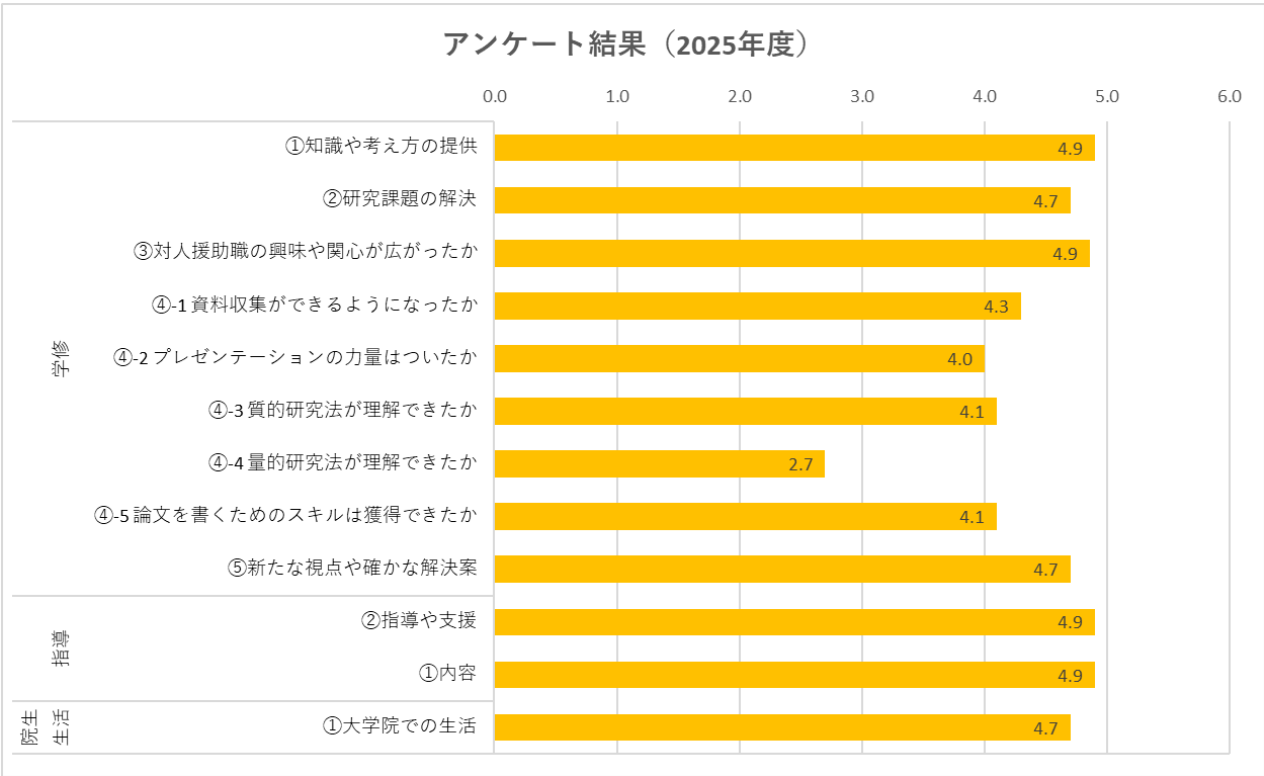


武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科 修了生アンケート結果と回答

(回答者7名:修士7名/博士後期ナシ)

項目	設問	評価※					2025年度 平均	2024年度 平均
		1	2	3	4	5		
学修を振り返って	(1) 大学院での学修は、全体としてあなたの期待に応えるものでしたか。	0	0	0	1	6	4.9	4.5
	(2) 大学院での学修は、あなたの専門分野の研究課題に活用できるものでしたか。	0	0	0	2	5	4.7	4.5
	(3) 大学院での学修を通して、“対人援助職”に対する理解が一層深まりましたか。	0	0	0	1	6	4.9	4.7
	(4)_①自分で必要な資料やデータの収集ができるようになった。	0	0	0	5	2	4.3	4
	(4)_②プレゼンテーションの力量がついた。	0	1	1	2	3	4.0	3.9
	(4)_③質的研究の調査方法や分析方法について、一定程度の理解ができた。	0	0	2	2	3	4.1	3.8
	(4)_④量的研究の調査方法や分析方法について、一定程度の理解ができた。	0	3	3	1	0	2.7	2.9
	(4)_⑤論文を執筆するための知識やスキルが獲得できた。	0	0	1	4	2	4.1	3.5
	(5) 大学院での学修を通して、あなたの職場や関連領域で生じている課題や問題に対する新たな視点や取り組むヒントを得ることができましたか。	0	0	0	2	5	4.7	4.4
教員の授業や研究指導について	(1) 大学院で提供する授業は、充実した内容でしたか。	0	0	1	0	6	4.9	4.6
	(2) あなたの指導教員の指導やゼミの院生の支援は、充実していましたか。	0	0	0	1	6	4.9	4.6
院生生活について	(1) 大学院での生活（授業や研究環境、交友関係を含）は、充実していましたか。	0	0	0	2	5	4.7	4.5

※1-5 の 5 段階評価で、5 が最も高い評価



1. あなたの学修を振り返って

(1) 大学院での学修(教員や学友、調査対象者からの学び、調査実施や論文作成等を含…以下同様)は、
あなたに期待に応えるものでしたか

【期待に応えたと思う内容(知識やものの捉え方等)】

- 授業の展開や声掛け等すべての点において、良かったです。
- 授業や演習での学びはもちろんですが、先生方の人間性からも多くの学びがありました。大学院での学びを通して、自分自身の在り方や考え方が大きく変化し、人生観にも影響を与えるような2年間でした。
- 論文の構造や作成のスキルを学びました。
- 学術研究がいかに客観性を重んじるかについて思い知らされた。量的研究と質的研究が各々の持ち味を生かして補完し合うような研究方法が、これからの時代には必要になるのではないかと思い至った。また、自分自身(当事者)を研究対象とする質的研究のノウハウがいまだ確立されていないことは大きな課題であると感じた。
- これまでの自分だけでは存在すら気付かなかった広い視点を知れた。
- ゼミの教授やゼミ(博士課程)の方々からのご指導・ご助言のお蔭で修士論文が完成した。
- 中井先生のアセスメントの授業や、安東先生の調査法の授業など、学部よりも専門的な学びを得られたと感じます。

【期待に十分に答えなかったと思う内容】

- さまざまな臨床現場で汗をかいている社会人学生の豊かな知見を、授業内容に積極的に反映させる創意工夫が教員サイドに不足していると感じる。一般学生に対するのと同じスタンスで、教員が一方向的に学生に教える授業はつまらない。なぜなら情報が「古い」からだ。社会人学生たちが届けてくれる、生の、最新の情報を皆で共有する機会を創出すべきである。
- 学会との繋がり

→ 社会人院生の豊かな知見を授業に反映させることは確かに大事です。しかしながら、授業内容によっては、基礎・基本の知識や技術を伝えることに重きを置くこともあります。また、院生の専門分野も多岐にわたるので、ある分野の方には既知であっても、他の分野の方には初めてということもあり、知らない方に合わせての説明も必要になることもまた事実です。

教員としては、院生の経験を尊重し、それを授業計画の範囲内でどう活かしていくのか、院生の意見や考えを授業の中で出してもらえよう、授業計画を検討していくよう努めてまいります。ただ、一つ一つの授業でそれを求めるのではなく、いくつかの特論(講義)、臨床教育学総合演習やゼミといった大学院の授業全体を通して、院生の皆さんの経験や知識が授業の中で活かされ、他の院生への刺激、さらなる理解の促進になればとよいかと考えます。

(2) 大学院での学修は、あなたの専門分野の研究課題や実践の場における問題の解決に活用できるものでした

【特に活用できたと思う点】

- 論文を仕上げる中で自分の問いの答えが見えてきた事。
- 発達心理学。
- 全てです。
- 対人援助職として人を大切にする姿勢や、専門職としてのあり方について深く学ぶことができました。また、今までの実践を振り返りながら、自分自身の価値観や関わり方を見つめ直す機会となり、今後の教育・実践に活かせる学びになったと感じました。
- 志水先生の人権の授業などにおいて、現在の学校現場の課題などがよくわかり活用できたと感じます。
- 職場の同僚間での人間関係の改善。

(3) 大学院での学修を通して、“対人援助職”に対する理解が一層深まりましたか(とくに興味や関心が広まった点)

- 様々な職種の方々と関わり合う中で、それぞれが自身の仕事に誇りを持って働いているということがわかり、対人

援助職は大変ではありますが素敵な職業だなとより一層思いました。 ●教育社会学。

●対人援助職の仕事は「感情労働」であり、支援者自身のケアが必要であるということ。

●多角的な視野で対人援助に必要な知識や考え方を学べました。

●これまで自分の専門領域についての学びが中心でしたが、大学院での学びを通して、他の対人援助職の領域についても知ることができました。異なる領域の視点や実践に触れることで、自分の専門領域を相対的に捉え直すことができ、視野が広がりました。

(4) 大学院での学修についてお聞きします(本研究科での学修を通じて、特に身についたと感じる点)

●インタビュー調査によるナラティブ分析の手法についてイメージを描くことができた。

●発表資料のまとめ方や先行研究の調べ方、書き方などが身に付きました。 ●粘り強さ。

●教育についてです。 ●ナラティブアプローチについての考え方やスキル。 ●広い視点。

(5) 大学院での学修を通して、あなたの職場や関連領域で生じている課題や問題に対する新たな視点や取り組むヒントを得ることができましたか(今後、研究科に取り入れてもらいたい授業や取り組み)

●論文のプロットの考え方を 2 年のゼミで習ったが、1 年の前期の講義で聞けると早期から組み立てをしやすかったのではないかと思います。最後同期の方の論文の成果を共有する機会もあっても良いのではと思いました。

●大きすぎてまだまだ何があるのか解りません。

●教育、福祉、心理の各分野に関連する現場実習(見学)

●これからも、臨床について深く考える機会と、他の方々との交流を通して多様な視点に触れられる授業や取り組みがあるとよいと感じます。さまざまな専門領域の考え方を知ること、自身の実践を見つめ直す機会にもなるため、そのような機会が継続されることを期待しています。

→ 論文プロットの立て方については、1 年後期から始まる課題研究Ⅰ(論文指導)で指導があるかと思いますが、指導の教員によって、考え方が異なることもあります。というのは、院生が行おうとする研究の進行具合によるところがあるからです。つまり、どうしても個々の院生の問題関心を明確にし、研究計画(テーマや対象、方法など)を設定することが優先されます。ただ、1 年後期に「調査研究計画」の授業(担当:安東)がありますので、その中である程度触れることは可能かと思しますので、検討してみます。
修了前に、修士論文の成果を確認したいとの意見はあり、これまで(研究科主導ではなく)修了生有志で自主的に発表会がなされるなどしておりました。

2. 教員の授業や研究指導について

(1) 大学院で提供する授業は、充実した内容でしたか(特に良かった点や改善すべき点)

●講義だけでなく、自分たちで調べて発表する授業が多かった点が特に良かったです。

●改善すべき点は、オンデマンド授業は残念。 ●多分野の教育を受けられることが良かった。

●本研究科は対面とリモートのハイフレックス形式としていて、前期のある授業では、全回リモート授業のものがあつた。リモート実施の方が資料提示などの便利がいいとは思いますが、こうした授業の仕方はどうか…

●社会人の経験を活かした、授業[教育問題特論、臨床教育学総合演習、教育心理学特論、人間社会福祉学特論]は、これまでの経験を振り返る機会となりました。

●授業内容は非常に充実していました。これまで自分の専門領域だけでは得られなかった多様な視点に触れることができました。特に先生方からの鋭い視点には、毎授業「なるほど」と感じる場面が多く、目から鱗が落ちるような学びの連続でした。また、他者を尊重することの大切さや、多様な価値観に触れながら考えを深めていく姿勢について

も学ぶことができました。仕事との両立は大変でしたが、大学院での学びがあったからこそ、実践の中で多くの気づきを得ることができました。

→ オンデマンドの授業については、後〔3-(2)〕でも出てきますので、そこでコメントします。

遠方よりの受講生が増加する中で、リモート形式やオンデマンド形式の授業は大変好評であります。一方で、このようなご意見があるのも事実であることも十分承知しております。本授業では遠方の受講生も多く、その方々からは良かったというご意見もいただいております。また、基本の授業型式をハイフレックスとしているにもかかわらず、オンラインのみで行われた授業があったとの声もありました。次年度からは、受講生が履修登録を行う際に、授業形式が分かりやすいようにハイフレックス、オンラインのみ、オンデマンドのみ（例：本授業については「オンラインのみ」）と明記するようにします。

(2) あなたの指導教員の指導やゼミの院生の支援は充実していましたか（特に良かった点や改善すべき点）

●家庭の事情などを考慮していただいたことや、個々の状況に応じて柔軟に対応していただけた点がとても良かったです。分からないことも、分かりやすく分かるまで説明して下さった先生に感謝いたします。また、この2年間で、自身の学びに向かう姿勢が大きく変化しました。フィールドワークや読書会、学会参加などの経験を通して、大学院に来たからこそ、受け身ではなく自ら問いを持ち考えることの大切さに気づくことができました。このような変化は、今後の実践や研究にも活かしていきたいです。

●学生の能力に応じて導いていただき、心理的安全性が保たれた中で、学修をする事ができました。

●研究論文の執筆に当たり、的確な助言と指導を頂けたことに深く感謝している。また、いつも裏面につづく用意して、中年男性3人のゼミ生を笑顔で温かく迎えてくださった心遣いがうれしかった。欲を言えば、質的研究の歴史や方法論について、ゼミでもっと詳しく、深く掘り下げて教えていただきたいかった。

●一人一人に対して丁寧に話を聞く点が良かった。

●良かった点は、修士課程と博士後期課程の学生が同じゼミで学べた。

●気軽に相談できる雰囲気が特に良かったです。ゼミの時間は毎回楽しみにしていました。

3. 研究科での授業について

(1) ハイフレックス形式の授業（対面とリモートの混合）についてお聞かせください（授業についての意見や感想）

●社会人にとってありがたいシステムと思います。

●仕事と学業の両立がし易かった。対面とリモートを組み合わせた授業形態で、時間や場所に柔軟な対応ができた。

●対面もリモートもお互いのいい点があり、とても良かった。

●忙しい社会人学生にとってリモート参加の手段が用意されているのはありがたい。しかし、授業ではどうしても「お客さん」状態になり、対面参加者の発言が途切れたタイミングで、場つなぎにリモート参加者の発言が求められるという場面が多かったように記憶している。学生と教員の相互作用で授業を作っていくという観点からすれば、やはり大学に足を運んでいる対面参加者をより高く評価するべきではないかと思う。

●リモートでは十分なフィードバックが受けられなかった。

●対面授業は、良かった。

→ ハイフレックスは、対面とリモートのミックスとなります。板書や実物の提示など、臨機応変な対応といった点においては、授業実施者としてはやりにくい部分を感じていることもありますが、仕事の都合や居住場所による通学を考慮すると、学ぶ機会を広げるという意味でも、この授業方法は継続していきます。ただ、授業を行う側の教員の慣れや工夫という点で、改善する余地は大いにあると感じています。対面とリモートの混合においては、受講方式によって上記のような偏りが生じないよう公平性の担保が課

題であると受け止めており、今後の改善策を検討してまいります。

(2) オンデマンド形式の授業についてお聞かせください(授業についての意見や感想)

- せっかくなので、対面でもよかったと感じました。なぜなら、教授の顔つきやタイミング、身振り手振りも勉強です。それがオンラインでは感じられなかったからです。
- 平日は仕事があるため、土曜日のオンデマンド形式の授業はとても受けやすかったです。
- 行事と重なっても講義が受けられるので良いと思います。授業の内容によっては、対話をしたかったとも思います。
- 仕事と両立する上で、オンデマンド授業は大変ありがたかった。ただ、講義内容がアップデートされていない授業がある点が課題である。
- 私はオンデマンドが苦手でした。
- オンデマンド授業は、残念。
- 好きな時間に受けることができてよかったです。しかし、質問を気軽にでき難い点が少しだけ気になりました。

→ オンデマンド授業については、賛否が分かれました。本研究科では夜間の 2 コマしか授業時間が取れず、コマ設定が難しいため、週休 2 日が一般的になってはおりますが、土曜にも授業を入れておりました。ただ土曜は、院生にとっては家庭の事情や職場研修等で受講が難しくなる、教員にとっては学会や研究科行事によってコマ数確保が難しいといった事情もあり、2 年前からオンデマンド授業を試行的に取り入れています。皆さんからいただいた意見を検討し、今後どのような形で授業を進めていくのか、研究科で検討をしてまいります。

ただ、授業内容のアップデート、授業内容に対する質問やそれへの対応といった点に関する工夫など、できるところから改善をしてまいります。

(3) 本研究科のカリキュラムや授業内容についてお聞かせください(意見や要望)

- 心理学に関する科目が少ないと思います。対人援助職に必要な職能だと思しますので増やしてほしいです。
- 夜間 2 コマという時間枠での時間割設定、授業コマ数設定となりますので、授業科目を新たに増やすことは難しいことをご理解ください。心理学担当の教員とも話し合い、対応していけるようにします。

4. 大学院での学生生活について

(1) 大学院での生活(授業や研究環境、交友関係を含む)は、充実していましたか(特に良かった点や改善すべき点)

- ここでもしか出会えない人たちと出会えたこと。
- 先輩方とも同じ授業を受けることができ、交流する機会があった点がとてもよかったです。
- 同期の方と同じ価値観で切磋琢磨できた事。
- 図書館が充実していると感じました。これまで図書館を利用する機会はほとんどありませんでしたが、大学院に通うようになってからは、図書館に足を運ぶこと自体が楽しいと感じるようになりました。
- 同年代の院生3人が所属したゼミでの学びが刺激的で、楽しかった。しかし、女子大という環境は、想像以上に男性である自分にとっては窮屈で、居心地が良いとは言えなかった。図書館をはじめとする学内施設にもほとんど足を運ぶことができなかった。

(2) 大学院生活で、思い出に残っていることをご自由にお書きください

- 学校行事や基調講演、学園祭への参加などを通して、同期生以外の方々との交流の機会も多くありました。とても充実した学生生活を送ることができ、大学院生活を通してかけがえのない経験をすることができました。何歳になっても、青春はあるのだと実感しました。本当にありがとうございました。
- 毎回のゼミでの学びです。
- 50歳を過ぎて、もう一度学生生活を味わうことができた幸運に感謝している。働きながら学び、学びながら働くこ

と、それがどれほど幸せなことかを実感した。またいつか、研究の続きをできればと願う。

●文化祭の模擬売店。

●箕面の滝に遠足に行ったこと。

学生評価に対する研究科としてのコメント

修了生の皆さま、このたびはアンケートにご協力いただき、多くのご意見・ご要望をお寄せいただき、ありがとうございました。研究科では、2016年度より大学院生活を振り返る5件法によるアンケートを実施しています（それ以前は自由記述のみ）。自由記述を含むアンケート結果は、研究科の自己点検・評価の資料として活用し、教員間で共有するとともに、教育・研究指導の改善に努めています。以下、主な意見・要望について、研究科としての考え、対応をお伝えします。

5段階評価では、「学修成果」を除く各項目で概ね4以上の評価をいただき、教員による研究指導や院生同士の交流については、総じて肯定的な評価をいただきました。研究科として大変ありがたく受け止めています。一方、「学修成果」のうち、プレゼンテーション能力、質的研究法の理解、量的研究法の理解、論文作成スキルについては、比較的低い評価となりました。これは、皆さんが調査研究や論文執筆に取り組む中で、その難しさや奥深さを実感された結果でもあると考えます。指導する側としても、この結果を真摯に受け止め、こうした能力をより身につけやすくするための支援を一層充実させてまいります。とりわけ研究方法は、短期間で習得できるものではありません。修士課程では一人でも活用可能な研究方法を少なくとも一つ身につけていただくことを期待しています。そして修了後も、自ら調査研究を進め、先行研究を読み続ける中で、研究者・実践者としての力をさらに高めていただければと考えます。

自由記述で書いていただいた意見・要望については、項目ごとにコメントを記載した通りです。

改めまして、アンケートへのご協力に心より感謝申し上げます。修了生の皆さまからいただいた貴重な意見・要望を今後の本研究科における教育・研究指導や学修環境の改善に生かしてまいります。

臨床教育学研究科 自己評価委員会（2026年7月）